

## 紹介記事

# 大学と地域—協同の仕組みの構築と可能性

～ ゼミナール活動による実践 ～

和歌山大学経済学部

教授 鈴木 裕 範

大学は、そして大学人であるわたしは、地域のなかで、地域とともに何ができるか。この数年間、学生たちとその可能性を求めて、取り組んできた。主なフィールドは、和歌山県南部、いわゆる熊野地域である。その活動をとおして見えてきたことを述べてみたい。

## それは、近畿で一番小さな村から始まった

わたしたちのゼミが、実験場に選んだ最初のフィールドは、北山村であった。60歳代の女性4人による、奥熊野・北山郷のジビエ（鳥獣料理）と山菜を主体にした家庭料理レストラン「かからの食の店」が開店するころだった。村の地域資源調査に協力し、学生の目線で北山村の宝物を探し、村の食文化にも光を当てた。村特産のじゃばらの収穫時期には、ボランティア・アルバイト—労働は無給・宿泊交通・食事代は村当局が負担するという取り決めで3年間つづいた。

北山村へは、わたしが初めて訪れたときに比べて、格段に便利になった。当時、北山村への道は、国道42号を南下し三重県熊野市から行くか、奈良県五条市から国道169号を経て行くほかはなかった。所要時間は約5時間、現在は3時間ほどで和歌山県から国道169号で行くことが可能になった。1980年代当初、当時の村長が「命の道」と呼んだ国道は、交通不便の是正に役立ったが、過疎化と高齢化は歯止めがかからない。人口は500人余り、高齢化率は40%を超す。しかも、国道の開通でつながり、熊野川河口の町・新宮市と村内で一番近くなった集落の小松地区から、人口減が始まり、限界集落化してきた。

4人で始まった「かからの食の店」のオーナー兼料理人は、現在1人だけになったが、料理は奥熊野の伝統と最新の料理を組み合わせた食のフュージョンによって、新たな価値を生み出し続けている。じゃばらと唐辛子、味噌を材料に「じゃばら胡椒」が生まれ、東京のデザイナーが協力してしゃれたデザインの「じゃばらジュース」がつくられている。いま、学生と村の交流は途絶えたが、村で展開されるさまざまな連携と交流は、当時学生やわたしがチャートで示したことと変



北山村でのワークショップ

わらない。村には NPO も設立された。

## 調査・提案型から「協同」の実験へ

東牟婁郡那智勝浦町太田は、那智連峰を源とする太田川流域にある 10 の集落の総称である。コメを中心とした農業が、暮らしを支えてきた。昭和の、懐かしい農村の風景がいまも残っている。しかし、緑の水田のいっぽうで、耕作されないまま雑草が生い茂った耕作放棄地や休耕田が増え続けている。人口の減少、農業の担い手の高齢化、若者が人生の設計図を描くことができない農村。熊野の農村・太田は、だれがこの国の農業を守り、農村の景観を保全しているのか、という根源的な問いを発している。

2010 年 5 月、その太田地区で農家有志の組織である「太田地おこし会」と協同で休耕田の利活用モデルの研究を目的に、1.6 反（16 アール）の 2 枚の休耕田を借りてコメ作りを始めた。田植えは、12 人の学生のほぼ全員が初体験であった。7 月には田の草取りをし、稲刈りは、9 月初めに行なった。シカや虫による被害にあったものの、350 キロほどのコメを収穫した。精米したコメは、農家の協力を得ながら、イベントなどの会場で学生たちが販売し、完売した。

翌 2011 年は 1 反の休耕田を耕作し、8 月下旬に刈り取った。しかし、収穫したコメを保管してもらっていた農家の乾燥機が 9 月初めの台風で水没し、収穫はゼロとなった。2012 年 4 月 27 日、1 反の田で苗を植えた。学生は替わったが、3 年目のコメ作りが行なわれている。

この取り組みを、わたしたちは「太田米プロジェクト」と呼んでいる。学生が農村と協同することで、地域のなかに新たな種を蒔くことはできないか。学生の農作業のいっぽうで U ターン男性の子息が都市生活を捨てて父親のふるさとで農業をはじめ、県農業大学校の関係者が支援に参加、地元の食材を地域活性化に、という女性たちの取り組みが始まりつつある。地域づくりの傍観者から地域コミュニティの主体へ、住民の間にわずかだが、意識が変化する兆しがみられる。ただ、行政や調査研究機関のプランに乗っている面もうかがえる。地域力を喚起し、ブラッシュアップし、地域のなかに再生の知と経験をストックする仕組みづくりが求められ、主体性の確立が重要になっている。



那智勝浦町太田で田植え 2012 年 4 月

## コメ作りが教える「宝物」

いっぽう、学生たちはコメ作りをとおして—それはささやかな体験ではあるが一食の現

場である農村、農業が直面しているすがたをしり、自然とともに生きる村の時間と文化を学んでいる。昼は労働、夜は聞き取り。その成果は村の今昔と 365 日の暮らしを記録する『太田・むらの生活と文化誌～太田川流域に生きる人びと～』（A4 版 68 ページ）という民俗報告書にまとめた。いまでも生きる「むらの生活・文化」、そこには人としての生きる知恵と技術があふれている。暮らしのヒントをそこに見る 100 部印刷した報告書は地元紙の報道などで地域内外に知られることになり、多くの人たちからぜひ読みたいという希望が相次いだ。

大学院生と学部生の 2 人の女性が修士論文・卒業論文で太田をモデルに農村と若者の連携交流などについて取りあげた。地域の人びとの傍らに立つことで、見えてくる真実がある。それは、この国の農業政策の光と陰である。休耕田・耕作放棄地の増大は、熊野の緑と青き水がつくる農村景観の危機であり、全国各地の農村が直面している現実である。地域社会の基盤であるコミュニティ力は、人口減・少子高齢化によって、低下しつつある。しかし、農村、農業をめぐる厳しい環境下で、農家の人たちは決してうつむいて生きているばかりではないのだ、ということも。農業もいいなあ、今春卒業した女子学生の言葉である。太田地区で活動を始めて 3 回目の夏を迎えた。

### 聞き取り調査から始める商店街での連携

2012 年 6 月新宮市の仲之町商店街で商店を訪問し、店の歴史と経営、店と商店街の将来についてヒアリングをした。熊野地方最大の商店街で、仲之町に店を構えることはかつて商店主の夢であり、誇りであった。しかし、地域経済を支えてきた林業・製材業の低迷、郊外型大規模店の開店などにより、新宮市でも市街地の空洞化が進む。かつて繁栄の象徴だった商店街はシャッターを下ろした店が目立つ。現在営業している店は 50 店余り、そのうちの約 4 割、20 店を訪問した。聞き取りの結果は報告書にまとめ、それにもとづき学生と商店主による、商店街再生プランの検討を構想している。



いろいろな取り組み しかし人通りは少ない

### あらゆる答が現場にある。学生が行動するとき

あらゆる答が現場にある。フィールドワークの必要性を問う学生たちに、わたしはこう答える。かつて、ロスアンゼルス五輪取材した作家沢木耕太郎は、ジャーナリストには現場への渴望感がある、とその著書に書いた。わたしたちは、ジャーナリストではないけれど、その時、その場所にいたい。みずからの目で、耳で確かめ、自分なりの答えを探し

たい。信頼できるのは自分による一次情報、そのためにはみずからの五感を研ぎすます必要がある。現場に謙虚であるとき、歩いた距離は人を裏切らない。その最初の一步を踏み出すかどうかだ。学生が楽しみながら行動を起こすには、好奇心の扉を開くインセンティブが必要である。

フィールドは、どうしていつも遠い場所なのか。これも学生がしばしば発する問いである。和歌山市から約 200 キロ、自動車でも特急でも約 3 時間、多くのものが行きたがらない「辺境」だからこそ、やりたいではないか。だれもやりたがらない、からこそ意味がある。

学生と地域住民が価値を共有し合い、連携と交流の仕組みを構築していく。地域住民と学生が協同でつくりあげていく地元学は、その一手法である。わたしたちのゼミナールを主体とした地域づくりの実践は、さらに進化することが求められているが、自主と自律、互恵の精神を大切に、地域に学び、地域とともにあるゼミ活動は、地域再生への道を開く可能性をもっている。さあ、フィールドに出よう。



仲之町商店街の乾物店で